

昭和26年2月16日 第3種郵便物認可(毎月1回1日発行)
平成2年9月25日印刷 平成2年10月1日発行 第40巻 第10号 通巻第479号

10

1990 October No.479

小原流

插花
IKEBANA OHARA



9

意識を創り出す

土佐尚子とコンピュータ・グラフィックス

コンピュータ・グラフィックス (Computer Graphics 以下CGと略す) とは、コンピュータで作成した画像をディスプレイ装置に描くこと、あるいはその画像を指す。実用的には、デザイン、印刷、医療診断、建築設計、自動車や航空機のシミュレーションなどで大活躍をしているのだけれど、さてこれをアートの表現手段としてとり扱う段になってくると、いくつかの問題点があつて、その短い歴史の間にも何度かの浮沈を繰り返してきた。CGアートが本格的に台頭してくるのは一九八〇年代に入ってからで、この分野でもっとも活躍めざましい日本のアーティスト、河口洋一郎が未だ三十代後半の年齢であることから推しても、いかに新しいジャンルであるかがわかる。しかしコンピュータ技術の日進月歩の発展は様々な表現手段を開発してきているし、幼少の頃からコンピュータを使ったテクノプレイに親しんできた世代が成人化してきているので、CGアートにも何の違和感もなく参入してくる若者がこれから増え続けていくだろう。少なくとも表面的にはCGアートが今後ますます隆盛化していくことは、容易に予測される。

土佐尚子は、言うならば河口洋一郎に続く第

二世代のCGアーティストの筆頭に位置する作家である。もともとグラフィックデザインの勉強をしていたが、動きのある表現をしたいと考えているときに雑誌でCGの存在を知り(一九八二年)、CGの世界に入っていく。一九八四年から八六年まで演出家如月小春が主宰する劇団NOISEの公演の映像制作を担当し、他方、国内外のCGアート、ハイテクノロジーアート、映像&音楽などの展覧会に毎年のように出品あるいは入賞を重ねてきている。

この九月に個展を開き、ニューロコンピュータを使った新作を発表した(この原稿は個展前の取材をもとにして書いている)。ニューロコンピュータというのは、富士通が現在開発中のコンピュータで、学習機能を持つ点がこれまでのコンピュータとは異なる最大の特徴だそうである。学習機能ということについて土佐が私にしてくれたシンプルな説明を紹介すると――、

「四つの基本リズムを設定して各々を喜怒哀楽、楽と対応させ、たとえば喜のリズムを入力すると別なパターンのリズムと喜の表情のアニメーションを出力するようにニューロに教え込む。そこである人が自由にリズムを打って入力すると、ニューロは学習して喜怒哀楽の表情の

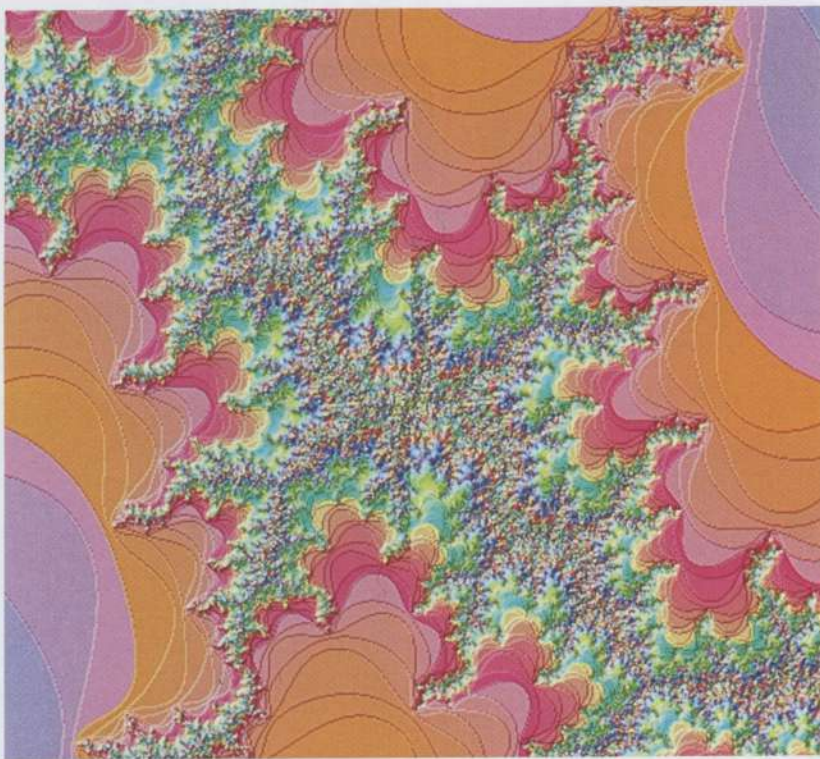
《Trip》 1989年



アニメーションと音を選択してディスプレイに出力する。また、最初に喜のリズムを入力し、次に怒のリズムを入力すると、喜から怒への表情の変化をニューロは画像を選択しながら出力することができる。」

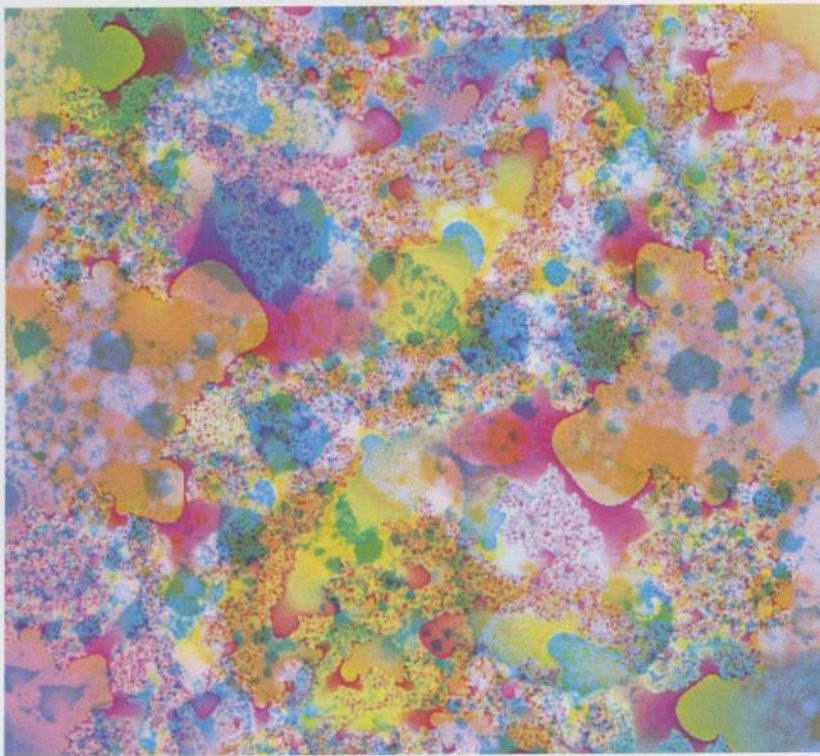
つまり、ある刺激に対して喜怒哀楽の感情をコンピュータが自ら選択しながら表現するということであろうか。機械の側に多少なりとも判断力の余地を与えようとしているところに、ニューロコンピュータの画期的な特徴が認められるわけだ。

CGは三次元の図形を自由に変化させたり、実際には見ることができない画像を表示することができたりして、非常に魅力的な表現メデイ



アであることは間違いない。しかしそれがコンピュータのシステムや数学に依るものである以上、アートとして成り立つものかどうかということが常に問題にされてくる。しかし私見では、CGが表現者のコンセプトを表すものであれば、それは充分アートたり得ると考える。しかし、ここで言う「コンセプト」とは、従来の芸術観の中で言われてきた「自己表現」とか「内面表現」といったこととは性格を異にするだろう。CGアートにおける「コンセプト」とは、図像

あるいは音の表現の可能性をコンピュータのシステム自体の中からどう引き出してくるかということにかかわってくるだろう。それはただ単に新奇なイメージを追いかけるというのではなく、むしろコンピュータとの協同作業で、ひとつの新しい意識を創り出す、といった感じに近い。このことを理解するには、たとえば土佐尚子にとってニューロコンピュータとは何か、ということを考えてみるとよい。彼女がやろうとしていることは、ニューロの学習機能を利用



して、人間的現実からもうひとつの新しい現実を生み出そうとする試みであるように思えるのである。
土佐は自らのコンセプトについて、「無意識や深層心理の世界に興味がある」と言っている。しかしそれは個別的な人間の無意識や深層心理を表現するということではないだろう。むしろ無意識や深層心理のヴィジョンを、ひとつの新しい意識として提示するということであって欲しいと思うのである。